

3 人間文化研究科の令和6年度FD活動

大妻女子大学大学院人間文化研究科FD委員会は、令和4年度～6年度の3年計画で、大学院におけるFD活動の実施計画を策定した。この実施計画にもとづき、個々の具体的なFD活動を実施してきたので、その実情を以下の通り報告し、今後の活動に繋げたい。

I. 令和4年～6年度大妻女子大学大学院FD実施計画

1. 基本方針

大学院FD委員会の協議のもと、院生の入学から修士課程修了ならびに博士後期課程修了までの全学習・研究過程を視野におさめながら、より質の高い教育ならびに研究指導の実践を目指して、大学院における教育力を高める。よって、大妻女子大学全学の教育力向上に貢献する。

① FD活動の目標

大学院FD活動の目標を次のように定める。

- ① 学部・短大FDと大学院FDの連携のもとで、学部の入学・卒業から大学院入学・修了までを展望したFD活動を実施する。
- ② 教育活動に有益なFDを実施することに努め、教員が協力しやすい状況をつくり、全員の参加を目指す。
- ③ 教員対象のFDにとどまらず、職員や院生の協力・連携を基盤とした、全体的なFDに取り組む。
- ④ 個々のプログラム内容の充実に努め、その成果に関する情報を集積し、関係者の間での共有化を進める。

② FD活動の計画

大学院FD活動の計画は次の通りとする。

- ① 「大学院進学意識に関するアンケート」
- ② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」
- ③ 「大学院修了時アンケート」
- ④ 院生・教員懇談会の実施
開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとする。懇談会の結果、院生からもたらされた意見・要望については、その都度、取りまとめて、FD委員会に報告する。
- ⑤ 学会発表の奨励に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑥ 学内発表会の奨励・支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑦ 院生論文集発行の支援に関する活動
「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」を掲載誌とし、編集事務局の援助を受けながら発行していく。
- ⑧ 他大学との各種連携の活性化に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑨ 就職支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。また、大学院生の就職支援体制の充実に努める。
- ⑩ 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動
社会人院生に対して制度の充実や環境整備を具体的にどのように推進していくか検討する。
- ⑪ 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動
専攻・専修内の授業間の整合性の検証やスリム化を視野に入れた教育・研究体制のあり方について検討する。
大学院の組織の見直しを随時検討する。

- | |
|--------------------------------|
| ⑫ その他の活動
大学院生室の有効活用の検討などを行う |
|--------------------------------|

II. FD 活動の実施状況

以下、3つのアンケート調査を実施した。①から③は、Google フォームによる WEB アンケートを利用している。

① 「大学院進学意識に関するアンケート」

大学院修士課程入学者を対象に、10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」

全大学院生を対象に、昨年度とほぼ同じ内容で 10～11 月に実施した。その結果については、「Ⅳ. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

③ 「大学院修了時アンケート」

令和6年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に2月～3月にかけて実施した。その結果については、「Ⅴ. 大学院修了時アンケート（結果の概要）」として、本報告書に掲載した。

Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）

Ⅲ-1 はじめに

大妻女子大学大学院人間文化研究科は平成22年4月（2010年）に改組して以来、15年目を迎えた。本年度も「大学院 FD 活動実施計画」に基づき、前年度とほぼ同様の内容で「大学院進学意識に関するアンケート」と「大学院の研究・教育に関する意見の収集」（Ⅳ.参照）を実施した。前者は修士1年生を対象に、後者は大学院生全員を対象に実施した。以下に両調査の結果の概要を提示する。

Ⅲ-2 進学意識に関する調査の目的と方法

「大学院進学意識に関するアンケート」の目的は、大学院進学にあたっての経緯や動機を把握し、いかにして多くの学生が集まる魅力的な大学院をつくるかの参考にすることにある。調査の方法は志望動機、志望決定にあたっての情報入手経路、他大学との併願状況、修了後のキャリア計画、大学院生活への抱負などを聞いた。

Ⅲ-3 調査の対象・時期・回収の状況

「大学院進学意識に関するアンケート」は、次の要領に基づいて実施した。

- (1) 調査対象：令和6年度人間文化研究科各専攻修士1年生22名
- (2) 調査期間：令和6年10月11日（金）～10月31日（木）→11月15日（金）まで延長
- (3) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート。
- (4) 回収状況：回答数18件、回答率81.8%

平成30年度から今年度までの1年生の回答者数と回答率を表1に示した。

表1 大学院進学意識に関するアンケート（新入学者）

対象者	平成30年度 (H30)	令和元年度 (R1)	令和2年度 (R2)	令和3年度 (R3)	令和4年度 (R4)	令和5年度 (R5)	令和6年度 (R6)
新入学者	18	18	18	12	27	16	22
回答者	12	17	15	10	16	11	18
回答率(%)	66.7	94.4	83.3	83.3	59.2	68.8	81.8

調査期間中、5度、回答催促を行った。その結果、今回の回収率は一昨年度の59.2%および昨年度の68.8%と比較すると大幅に増加した。

Ⅲ-4 大学院への進学の動機について

「本学大学院への進学を志望するに当たって、その動機に係る項目1～12に対してどの程度重視しましたか」との問いに対する結果を、表2に示した。「非常に重視した」5点、「かなり重視した」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまり重視しなかった」2点、「ほとんど重視しなかった」1点、「まったく考えたことがない」0点として平均点を算出した。

表2 大学院進学にあたって重視した動機項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		H30 (n=12)	R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)
1	将来、研究職・臨床職に就きたいこと	2.9	3.4	2.8	3.2	3.6	3.8	3.4
2	専門分野の学位が取れること	3.9	3.6	3.8	3.8	4.2	4.3	4.0
3	就職に有利になること	2.3	2.5	3.0	2.6	2.8	2.5	2.9
4	自宅・会社からの通学が便利なこと	3.0	2.6	3.3	2.9	2.5	2.5	3.8
5	指導を受けたい教員がいること	3.8	4.0	4.5	3.9	4.0	4.2	4.6
6	大学のネームバリューがあること	2.2	1.8	2.5	2.0	2.6	1.8	2.7
7	就職を先に延ばせること	1.6	1.3	1.3	1.2	1.4	1.4	1.3
8	希望する就職先がなかったこと	1.2	0.6	1.4	1.3	0.7	1.7	0.8
9	奨学金を受給できること	1.6	1.8	1.3	0.6	0.9	1.4	1.4
10	専門の資格が取れること	3.1	2.6	2.0	3.1	3.6	3.2	2.8
11	研究したいことがあること	3.8	4.1	4.2	3.6	4.0	4.2	4.5
12	在学中の学費の支払いのこと	3.4	2.9	3.4	2.8	2.9	2.4	3.9

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって重視した項目の全体的な傾向は過去6年間とほぼ同様であり、「指導を受けたい教員がいること」「専門分野の学位が取れること」「研究したいことがあること」といった項目が上位を占めた。また、「自宅・会社からの通学が便利なこと」「在学中の学費の支払いのこと」も比較的上位にあった。

Ⅲ-5 大学院進学にあたって影響を与えた情報源について

表3 大学院進学にあたって影響源となった項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		H30 (n=12)	R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)	R6 (n=18)
1	本学の先輩の研究成果を見たこと	1.7	2.4	2.0	1.6	2.2	2.3	2.4
2	大学院に行っている友人・知人からの情報	2.0	2.9	2.1	1.8	2.2	2.6	2.5
3	両親や兄弟姉妹から勧められたこと	2.2	1.9	1.3	0.9	1.5	1.5	1.4
4	自分の配偶者の意見	1.1	0.8	0.2	1.3	0.7	0.1	0.5
5	大学院紹介の受験雑誌などの記事	1.2	1.1	0.9	0.8	1.9	0.4	2.0
6	本学発行の大学院紹介パンフレット	2.6	2.6	2.3	1.4	3.4	3.1	2.5

7	学内の大学院進学説明会	2.9	1.8	2.6	2.1	3.3	2.8	2.6
8	学外の大学院進学説明会	0.8	0.8	0.2	1.4	1.8	1.3	1.6
9	本学のホームページの記事	2.0	2.9	2.5	1.3	2.9	2.5	2.6
10	指導教員になる教員との相談	4.2	4.2	4.5	3.6	3.6	3.6	4.6
11	学部時代お世話になった教員との相談	3.4	3.1	2.9	2.4	設問欄なし	設問欄なし	設問欄なし
12	出身の大学の先生との相談	3.6	2.5	2.0	2.5	2.6	3.3	3.2
13	出身の高校の先生との相談	0.2	0.4	0.3	0.0	0.2	0.2	0.0
14	教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから	3.6	3.9	3.9	3.1	3.3	3.4	4.2
15	他の大学院にはない独創的な文化資源（蔵書、マニュスクリプト、物的資料など）があると考えたから	1.8	1.9	2.4	1.6	2.4	1.5	2.2

※表中数値は平均値

大学院進学にあたって影響を与えた情報源は、例年通り「指導教員になる教員との相談」の平均点数が 4.6 と高かった。また、「教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから」も 4.2 と高かった。

Ⅲ-6 他大学の受験状況：

「他の大学院を受験しましたか」の質問に対しては、18 名中 13 名が「いいえ」と答えた。回答者の内、他大学大学院受験生は 5 名であった。

Ⅲ-7 大学院修了後の進路及びどのような大学院生活を送りたいか

「大学院修了後の進路は、どのように考えていますか」については、平成 30 年度からの推移を表 4 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 4 大学院修了後の進路について（複数回答）

	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
1 博士後期課程に進学したい	42	35	13	0	37	36	22
2 外国に留学したい	17	6	0	10	6	9	11
3 教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい	25	12	13	0	6	18	11
4 専門社会調査士として就職したい	17	6	0	0	0	0	0
5 臨床心理士として就職したい	33	24	13	40	44	27	16
6 研究機関で研究開発の仕事に就きたい	8	24	13	20	19	27	11
7 民間企業で一般職の業務に就きたい	17	24	20	0	19	18	33
8 民間企業で総合職の業務に就きたい	17	24	13	30	12	0	22
9 公務員として就職したい	17	12	20	0	25	18	0
10 大学教員として就職したい	8	29	13	0	12	27	27
11 まだ具体的に考えていない	8	18	27	60	19	27	27

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

大学院修了後の進路は回答率が高い順に、「民間企業で一般職の業務に就きたい」が 33%、「大学教員として就職したい」と「まだ具体的に考えていない」が 27%、「博士後期課程に進学したい」と「民間企業で総合職の業務に就きたい」が 22%という結果が得られた。

自由記述欄には、以下の記載があった。

- ・博士課程に進むか、そのまま現職の教員で頑張るかの 2 択だと思うが、今の研究で博士課程まで行けるかわからないから、そこまで考えられていない。

「どんな大学院生活を送りたいか」の質問に対しては、平成 30 年度からの推移を表 5 にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 5 どんな大学院生活を送りたいか（複数回答）

	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
1 専門分野についての研究センターの生活をした	17	59	53	30	37	54	50
2 研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をした	50	53	80	70	62	72	55
3 たくさん授業科目を履修して社会に出るための教養を深めたい	25	18	0	30	25	18	16
4 就職活動や資格を取るための時間を多くしたい	8	18	0	30	25	9	16
5 就職活動を早めに始めて、まずは就職を決めたい	8	12	20	20	12	0	16
6 狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい	25	18	47	30	56	27	16
7 アルバイトや遊びはできるだけ控えたい	17	12	7	10	12	9	5
8 アルバイトや遊びも大いにやりたい	8	12	13	20	19	27	27
9 自由な時間をできるだけ楽しみたい	17	18	33	20	25	36	11
10 どうするか、まだはつきり考えていない		9	7	0	0	0	5

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は 100%を超えている。

どんな大学院生活を送りたいかについては回答率が高い順に、「研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をした」55%、「専門分野についての研究センターの生活をした」50%、「アルバイトや遊びも大いにやりたい」27%、「たくさん授業科目を履修して社会に出るための教養を深めたい」「就職活動や資格を取るための時間を多くしたい」「就職活動を早めに始めて、まずは就職を決めたい」「狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい」がそれぞれ 16%という結果が得られた。

Ⅲ-8 大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと

「大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと」の質問に対しては、以下の 7 件の記載があった。

- ・入学試験の準備。
- ・修士論文を書けるのが心配でした。また、男性だけど、女子大学で希望している先生のもとで学べるのが心配だった。また家族を養いながら大学院で学べるのかも考えた。
- ・学費
- ・本当に臨床心理士になりたいかどうか。
- ・自分に研究ができるのか、不安に感じていました。
- ・研究テーマの選定。
- ・子育てと家事、小学校教員としての仕事、研究。全てこなせるか悩んだ。あと、学費を支払えるのかや、進学することの大変さとメリットを秤にかけて悩んでいた。ただ、大学院に進学して、様々な発見や、研究内容以外の学びが多くあり、とても充実しているし、すぐに仕事に活かせるので、とてもやりがいがある。いつもありがとうございます。

IV. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）

「大学院の研究・教育に関する意見の収集」は、全大学院生を対象に授業内容、履修環境、事務体制に対して点数による客観的評価と自由記述による意見を集約し、授業方法の改善、カリキュラムの構成、設備の整備など、教育改革に反映させることを目的としている。

平成25年度から回答を、「非常にそう思う；5点」から「まったくそう思わない；1点」までの5段階評価としている。評価点は、回答者全員の平均点と最高点、最低点を算出している。

- (1) 調査対象：大学院人間文化研究科に在籍する大学院生 49 名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和 6 年 10 月 11 日（金）～10 月 31 日（木）→11 月 15 日（金）まで延長
- (4) 回収状況：回答数 42 件 回答率 85.7%

結果の概要は以下の通りである。

IV-1 各評価項目

大学院の授業全般についての評価は表 6 の通りである。問 1 から問 5 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 4.1 以上の高い評価が得られた。

表 6 大学院の授業全般についての評価

課程	回答数	問1	問2	問3	問4	問5
		シラバスに記載された到達目標に示された知識や能力を獲得できた	授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった	授業の内容は専門知識等を習得する上で十分な意義が感じられた	研究指導や論文指導のあり方について適切であった	学外研究・学外実習について希望通り実施することができた
修士課程	35	4.2	4.4	4.3	4.5	4.0
博士後期課程	7	4.2	4.3	4.3	4.3	4.5
全平均	42	4.2	4.4	4.3	4.5	4.1
最高点	42	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		3.0	3.0	3.0	3.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

大学院の履修および研究環境については表 7 の通りである。

問 6 から問 9 までの各項目の全平均は 5 段階評価でいずれも 3.7 以上の高い評価が得られた。ただし、博士後期課程は「院生自習室の利用方法」の評価が 3.2 に留まっていた。

表 7 大学院の履修および研究環境について

課程	回答数	問6	問7	問8	問9
		システム全般の手続き方法について分かりやすかった	ガイダンスの日程や実施方法について適切であった	図書館他学校の施設設備について満足している	院生自習室の利用方法について満足している
修士課程	35	3.7	4.0	3.9	3.8
博士後期課程	7	4.3	4.1	3.7	3.2
全平均	42	3.8	4.0	3.9	3.7
最高点	42	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		2.0	2.0	2.0	1.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

教育・研究支援については表8の通りである。

問10から問14までの各項目の全平均は5段階評価でいずれも3.5以上と一定の評価が得られた。ただし、博士後期課程は「院生自習室の設備」の評価が3.3に留まっていた。

表8 教育・研究支援について

課程	回答数	問10 院生自習室の設備について満足している	問11 事務職員の対応は適切であった	問12 大学院の学費・奨学金は適切であった	問14 授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた。
修士課程	35	3.5	4.2	3.7	4.2
博士後期課程	7	3.3	4.6	4.3	4.5
全平均	42	3.5	4.3	3.8	4.2
最高点	42	5.0	5.0	5.0	5.0
最低点		1.0	2.0	1.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

IV-2 大学院の授業全般（問1～5）、履修・研究環境（問6～9）、教育・研究支援（問10～12）に関する自由記述欄への記述状況

自由記述欄に記載された意見については、そのままの意見を箇条書きで以下に記載する。

問1.「大学院の授業ではシラバスに記載された到達目標として示された知識や能力を獲得できた。」

- ・3と回答した理由は、履修者が1名や少数だった場合、個人の研究内容や興味に応じて授業内容を変更してくれるため、シラバス通りとは一概に言えないから。
- ・単位取得済みで、授業を履修していない。
- ・内容を大幅に変更する授業が多いと感じた。
- ・日頃より大変そのように感じております。私の力量不足により、知識や能力が追いついていない部分もありますが、先生方の尽力にいつも感謝いたします。

問2.「授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった。」

- ・水準は高く感じる。特に学部生からの積み上げでないとその差があると感じる。範囲は研究課題に必要な専門的知識のなかから厳選していただいている。
- ・とても丁寧な授業をしてくださり、大変勉強になりました。
- ・単位取得済みで、授業を履修していない。
- ・専門的な知識を得ることができて、とても学びがよいがある。
- ・生徒に合わせて授業内容を決めてくださり、非常に適切であったと感じております。

問3.「授業の内容は専門知識等を習得する上で、十分な意義が感じられた。」

- ・直接的なもの、間接的なものとおりに混ざっていく意義を感じる。
- ・先生方の専門分野を十分に堪能できる授業であったと感じます。
- ・単位取得済みで、授業を履修していない。
- ・興味あるトピックを扱う授業が多い。
- ・授業を終えた後に、自分の言葉として他者に伝えるまでに自分のものとしてできていないことも多いが、現在保育士としても働いていても獲得できない部分を知ることができたように思います。

問4.「研究指導や論文指導のあり方について適切であった。」

- ・担当教員による指導はいつも丁寧で迅速で、とてもありがたい。ただ、保育・教育学専修には、博士後期課程を担当する教員が少ないので、それをもっと増やしてほしい。
- ・教員自体の専門が把握しきれていない段階や対面していないなかで、研究テーマにそって指導頂く教員（主と副）を決めていくのは難しい。また、研究指導や論文指導がどういうものなのか、まだ理解できていないため評価できない。
- ・学生の希望する研究内容に合わせて、労を惜しまずご指導くださる先生に感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・もう少し手厚く指導して欲しいと感じた。
- ・研究について理解していない部分も多いが、自分に合わせた研究の進め方を提示してくれているように思います。また、研究の相談についても先生が随時時間を割いてくださるため、不安や疑問点が残りにくく、研究を進められているように感じています。

問5.「学外研究・学外実習について希望通り実施することができた。」

- ・問いの内容が理解できていない。
- ・実施していないからわからない
- ・行っていない

問 6.「システム全般（UNIPA での履修登録、研究助成）の手続き方法について分かりやすかった。」

- ・後期履修の添削は複雑でした。
- ・ガイドがあったのでなんとか申請できたが、難しい。
- ・特に UNIPA の操作に関する説明等がなく、自力で理解する必要があった。
- ・少し操作しにくく感じる。

問7.「ガイダンスの日程や実施方法について適切であった。」

- ・遠方に住んでおり、オンライン上での対応をしていただけた点が非常に助かりました。
- ・仕事をしているので、ガイダンスの時間に間に合わないことがある。可能であれば動画配信もできると嬉しい。
- ・対面が必須なのか、オンラインが可能なのかふめいであった。また、学部生と院生への配信内容が同じであるものは、その中から自身が対象であるかどうかを見極める必要があり複雑だと感じる。
- ・仕事をしている関係でうまく調整できないこともあるのは、自分の問題だと思っているので問題はないです。
- ・ガイダンスは入学式のあとにしてほしい。
- ・特に思うところはない。
- ・これは仕方ないと思っているのですが、もし仕事の後でも参加できるガイダンスや、オンラインで参加できるガイダンスが増えれば、嬉しいかなと思いました。

問8.「図書館他の学校の設備について満足している。」

- ・千代田）図書館の建物が離れているのが不便。学内施設の利用について、用途や場所の全貌がわかりにくいため、可視化できるとよい。
- ・利用したことがない。
- ・千代田キャンパスで活動する時間があまりないので利用できていません。
- ・臨床心理学研究など、臨床心理の専門雑誌が千代田キャンパスにあって不便に感じる。
- ・多摩キャンパス図書室で電源をとれるようにしてほしい
- ・欲しい図書が少なく、もう少し専門的な本を用意してほしい。

問9.「大学院生室・大学院生自習室の利用方法（利用時間も含む）について満足している。」

- ・休日の利用時間が長めに確保されていると、仕事が休みの日に利用しやすいと思った。
- ・千代田）まだ利用回数が少ないが場所が離れている分使いにくい。
- ・移転し研究室等への移動が大変になった。狭くなり使いにくい
- ・千代田キャンパスの院生室は不便になったと思います
- ・千代田キャンパスで、とてもいい環境で使用させていただいていたが、引っ越してから使用できていません。
- ・千代田キャンパスの院生室が教室や学食がある建物から離れたところに移転したため、不便になってあまり使用しなくなった。
- ・学生証を忘れた場合なかに入れないのはやめて欲しい。また中に学生証を置いたまま外に出た場合の対処をどうにかして欲しい。
- ・個人の自習できるスペースがあると助かります。
- ・千代田キャンパス。院生室が不便な位置に移動されたため利用頻度が非常に減った。
- ・(千代田キャンパスについて) 院生室の環境には満足しているものの、院生室の場所が E・F 棟(主に授業が実施される)から距離があるため利用しにくく感じています。院生室と距離があることで荷物を置いておけるロッカーも遠く、授業の前後に荷物を取りに行けず正直あまり活用出来ていません。改善されたら嬉しいです。

問 10.「大学院生室・大学院生自習室の設備（PC・プリンタなどの設置機器、辞書・参考文献などの資料、室内レイアウト）について満足している。」

- ・千代田キャンパス、修士論文印刷時には、家庭用プリンターではなく、業務用印刷機の利用ができるようにして欲しい
- ・多摩キャンパス)コピー機が壊れて、使えない時が多々あります。
- ・千代田) 紙ぎれ間近の状態に出くわすことが多い。院生自身が常に補充できるとよい。プリンターが起動せず、使えない台があると他の院生たちと混雑する。プリンター設定の不備かどうか不明。
- ・プリンターの選択が使いにくい。パソコンルームでは席の周りに余裕がなく資料を見ながらの作業がしにくい。
- ・多摩キャンパス)コピー機は性能低く、プリンターも白黒、片面印刷しかできず、性能があまりよくない。P Cまわりの環境をよくしてほしい。
- ・多摩キャンパス) Wi-Fi やプリンターの接続、調子が悪く対応に時間を取られる
- ・ID パスワードがわからなくなってしまい使用していません。
- ・千代田、新しく院生室が代わり、以前よりもプリンターや、在庫が置いてあるなど使いやすくなりました。ありがとうございます。しかし、論文提出時には、何百枚も印刷する必要があるので、その時は業務用印刷機の使用ができるようにして欲しいです。また、穴あけパンチも業務用のが使えるようにして欲しいです。よろしくお願いします
- ・プリンターについて、現状印刷できないことはないが、今年度2台故障したこともあり、今動いているものも心配である。
- ・プリンタの接続トラブルがよく起きるが、現状は院生で時間をかけて直している？できれば大学側でサポートをしてもらいたい。
- ・多摩キャンパス院生室は、Wi-Fi、コピー機の調子が良くないことがしばしばあります。
- ・ミーティング室を増やして欲しい。
- ・いつもお世話になっております。穴あけパンチを用意してくださるととても助かります。
- ・もし可能であれば、ワードのトランスクリプトのような機能があると、事前に記録している動画や音声を、文字化できるので、助かるかなと思いました。
- ・千代田キャンパスの院生室にホッチキスを置いてほしいです。

問 11. 「事務職員の対応は適切であった。」

- ・メールで問い合わせした際、すぐに対応していただけたので安心しました。
- ・メールでの問い合わせの場合、担当された方が名前を載せて下さる場合とそうでない場合があります、どなたとやりとりしているのか、不安になることがあります。また、対面で受けた履修の説明が人によって異なり、解決できず次回に持ち越しとしている。
- ・多摩校のカウンターの対応が不適切だと感じた。理由として、カウンターに行っても声をかけても職員同士で目くばせして対応を押し付けあったり、嫌々対応していることが表情・態度に出ている。業務に追われてイライラするのもわからなくはないが、あくまで業務なので態度に出さないほうが良いと考える。説明も前提や条件、主語・述語が整理されておらずわかりにくい。こちらから複数回質問することで理解することができたが、学生対応については職員全体で再構築するべきだと考える。
- ・いつも丁寧に親身になって対応してくださるので感謝しています。

問 12. 「大学院の学費・奨学金制度について」

- ・就業していても、奨学金をもらっても良いものなのか、わからなかった。
- ・学費が高すぎる。
- ・学費以上の指導をしていただいていると感じている。
- ・大学院生は、学内給付型奨学金の家計基準をもう少し緩和してほしい。
- ・学費や奨学金制度には問題ないと思うが、研究費が圧倒的に足りないです。

IV-3 ハラスメントについて

ハラスメントに関する平成 30 年度からの調査結果を図 1 に示した。令和 6 年度は「経験がある」が 1 名、「答えたくない」が 4 名であった。自由記述欄には 1 名が次のような意見を述べていた。なお、アンケートを取る際に回答結果は慎重に扱う旨、例年通り明記している。

- ・自分ではないが修士の同級生が、指導教員ではないがゼミに参加している教員から人格否定とも取れる事を言われていたそうで、家の外に出れず、学校にも通えなくなる事があった。研究内容などは違えどこの様な事で同志を失うのは悲しいです。

これまでもアンケート結果から、ハラスメントあるいはそれに近い状況が存在していることが推測されたが、今回のアンケートと後述する p14 の大学院修了時アンケート「V-5 教育全般についての自由記述」から、アカデミックハラスメントを疑う案件が発生していることがわかった。ハラスメントもそれに近い状況も本来一件もあってはならないことである。ハラスメントは一過性の行為ではなく繰り返して行われることがあり、教員にハラスメントの認識がないケースもある。

本学では学生が副指導教員を含めた複数の教員から指導を受けられる体制を整え、学生の SOS 信号をできる限り早いうちに見つけ出す仕組みを確立している。さらに、このような案件に対しては指導教員の変更も可能にしている。

今後も次に記すハラスメント防止対策を徹底する。

- ① FD アンケートの回答について、修了生も申し出ができる機会を確保する措置を講じる。
事案には FD 委員、ハラスメント委員、専攻教員が適宜対応する。
- ② ハラスメントに関する回答の FD 報告書への記載は、一部表現について個人を特定しづらい形に修正する。
- ③ 代議員会、専攻会議等で FD 報告書を説明する際、ハラスメントに関するアンケート結果を必ず報告し、注意喚起を行う。

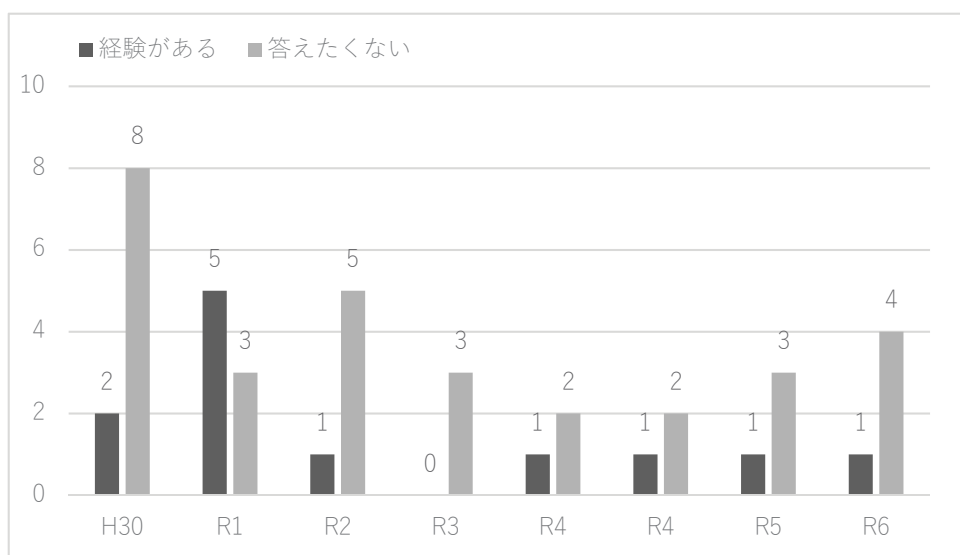


図1 ハラスメントについて

IV-4 社会人特別選抜の入学者への配慮について

社会人特別選抜の入学者を対象にした「授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた」かの問いでは21名から回答を得た。80%が「5 非常にそう思う」か「4 そう思う」のいずれかであった。

社会人入学者の自由記述は4件あった。

- ・人数が少なく、たまに予定通りではなく、先生のご都合に合わせることがあった。
- ・長期休業中などに集中的に行ってくださったり、オンラインで開催してくださったので、家族のことへの影響を小さくできた。
- ・受講者が決定してから授業中に開始直前まで、または1回目まで、授業な、スケジュールや受講方法が決まらないため、履修登録できた時点で前回後期とも暫定的な目安があると良い。
- ・長期休暇や土日の分散、オンラインの活用のおかげで、なんとか、子育てをしながらできています。ご配慮いただき、ありがとうございます。

IV-5 その他意見・希望について

この質問に対する自由記述欄には以下のような記述があった。

- ・保育・教育学専修の博士後期課程教員を増やしてください。
- ・OneDriveの機能で、大妻のアカウントでデータを保存できる機能が含まれていると助かると思った。研究するにあたって、データや動画、研究の記録など、様々なデータを格納する場所が必要になってきた。昔はUSBなどがあったが、クラウドに保存するのが1番安全だが、私物のクラウドはあつという間にいっぱいになってしまうので、本当はよくないと思うが、今は職場のクラウドに保存をしている。
大学のアカウントでOneDriveにデータを保存できるようになると、Wordのトランスクリプトも使えるし、セキュリティ上安全な場所にはデータを保存できるため、便利だと思った。いろいろ希望を書いてしまいすみません。ご検討いただければと思います。
- ・いつもありがとうございます。
- ・引き続きよろしくお願いいたします。

V. 大学院修了時アンケート（結果の概要）

V-1 大学院修了時アンケートの目的

このアンケートは、令和7年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に在学期間中の学修環境や体験・修得した能力について把握し、また自由記述による意見を集約することで、教育・研究環境改善につなげることを目的として、令和3年度より新たに実施した。

V-2 調査対象・方法・期間・回収状況

- (1) 調査対象：大学院修士課程及び博士後期課程修了予定者（満期退学含む）17名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和7年2月26日（水）～3月15日（土）
- (4) 回収状況：回答数 12 件 回答率 70.6%

※今年度、博士後期課程人間生活科学専攻・言語文化学専攻および修士課程現代社会研究専攻で修了者はいない。

	博士後期課程 人間生活科学 専攻	博士後期課程 言語文化学 専攻	修士課程 人間生活科学 専攻	修士課程 言語文化学 専攻	修士課程 現代社会研究 専攻	修士課程 臨床心理学 専攻
回答数	0	0	4	5	0	3

結果の概要は以下の通りである。

V-3 学修環境等についての評価

評価は表9の通りである。問1から問6までの各項目は4段階評価で「そう思う」4点、「ある程度そう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「そう思わない」1点として平均点を算出した。

表9 研究・授業、進路、学生生活についての評価

	回答数	問1 本学大学院在 学中は研究・ 学業に意欲的 に取り組まし たか	問2 開講科目の 数や種類は 十分でした か。	問3 授業内容 は、全体と して満足し ています か。	問4 研究指導や論文 指導について指 導教員から十分 な指導を受ける ことができました か。	問5 修了後の進 路は希望に 沿ったもの になりました か	問6 大学院での 学生生活に 満足してい ますか。
全平均	12	3.5	2.9	3.6	3.3	3.2	3.3
最高点		4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0
最低点		1.0	1.0	3.0	2.0	1.0	2.0

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

問1から問6までの各項目の全平均は問2を除くと4段階評価でいずれも3.2以上とかなり高い評価が得られた。問2「開講科目の数や種類は十分でしたか」の全平均が2.9に留まり、この点で課題が残った。

V-4 大学院在学中に体験・修得した能力

知識や能力の向上に大きく役立ったことを表10に、在学中に修得した能力について表11にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表 1 0 知識や能力の向上に大きく役立ったことについて（複数回答）

	R3	R4	R5	R6
1 大学院での授業全般	70.0	50.0	78.6	83.3
2 指導教員による指導	90.0	75.0	64.3	83.3
3 研究活動	90.0	50.0	75.0	83.3
4 論文執筆	70.0	25.0	78.6	66.7
5 論文発表、最終試験	50.0	25.0	57.1	66.7
6 資格取得	0.0	12.5	25.0	16.7
7 院生時代に築いた人脈	50.0	50.0	53.6	41.7
8 その他	0.0	12.5	7.1	25.0
9 特に役立っているものはない	0.0	12.5	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

知識や能力の向上に大きく役立ったこととしては、「大学院での授業全般」、「指導教員による指導」、「研究活動」がいずれも 83.3%と高い回答率を示した。また「論文執筆」と「論文発表、最終試験」も 66.7%と高かった。「特に役立っているものはない」の回答率が 0%であったことから大学院の授業と研究活動、それに対する教員による指導といった大学院生活の中核的な営みが院生の知識や能力の向上に確実に寄与していたと言えるだろう。

「資格取得」は 16.7%に留まっているが、カリキュラムが専門資格の取得に関連する専攻と、そうでない専攻があるため、全専攻の院生に回答してもらう必要があるのか疑問が残る設問ある。資格取得が重要な専攻にとって、回答率の結果があまり参考にならないため、今後、設問の見直しも必要であろう。

表 1 1 在学中に修得した能力について（複数回答）

	R3	R4	R5	R6
1 教養	30.0	12.5	35.7	75.0
2 ものごとを分析する力	90.0	50.0	64.3	58.3
3 問題を論理的に考える力	80.0	50.0	57.1	50.0
4 特定の専門分野に関する理解力	70.0	75.0	75.0	66.7
5 肯定的な意味で批判的に考える力	30.0	37.5	17.9	58.3
6 自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	60.0	75.0	32.1	66.7
7 リーダーシップ	0.0	12.5	7.1	8.3
8 人間関係を築いたり調整する力	30.0	87.5	32.1	41.7
9 地域社会が抱える問題への関心や理解力	20.0	37.5	14.3	25.0
10 明快かつ簡潔に話す力	20.0	25.0	28.6	33.3
11 表現すべき内容の文章を書く力	50.0	62.5	46.4	41.7
12 英語以外の外国語の運用力	0.0	0.0	3.6	0.0
13 プレゼンテーションを準備し発表する力	60.0	50.0	53.6	58.3
14 学術的な文献の読解力	40.0	62.5	39.3	41.7
15 情報技術（ICT）の運用力	10.0	0.0	17.9	0.0
16 国際的な諸問題に対する関心や理解力	0.0	0.0	3.6	8.3
17 英語の運用力	0.0	0.0	3.6	8.3
18 ものごとの本質をみて判断しようとする力	50.0	37.5	28.6	41.7
19 自分を律して行動する力	40.0	37.5	25	33.3
20 得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	60.0	50.0	21.4	33.3
21 これらの項目については特に伸びていない	0.0	0.0	0.0	0.0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

在学中に修得した能力については「教養」が 75.0%、「特定の専門分野に関する理解力」と「自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力」が 66.7%と回答率が高かった。また「肯定的

な意味で批判的に考える力」、「ものごとを分析する力」と「プレゼンテーションを準備し発表する力」が 58.3%となった。

これらの結果は、修了生の多くがカリキュラム・ポリシーに沿った教育を受け、ディプロマ・ポリシーに定められた専門知識や技能を修得したと評価しているものと考えられる。ただし、21 世紀の社会において指導的な役割を担うための「リーダーシップ」についてはまだ課題が残っていると言えよう。

V-5 教育全般についての自由記述

教育全般について、以下のような自由記述があった。

- ・言語学に関する授業、基礎を学べる授業がもっと欲しかった。
- ・日本語学を学ぶため、もっと様々な分野の教諭に学びたかったです。
- ・講義内で扱う問題が、修士論文の研究に直結している院生とそうでない院生の格差が激しく、研究の進捗において理不尽だと感じるが多かった。指導教員からプライベートに関する話を講義内で引き合いに出され、院生として指導を受ける内容との境界を曖昧にして指摘され、傷ついた。それから連絡を取ることが怖くなってしまい、研究のために教授と連絡を取ることも怖く、支障が出た。

VI. 院生・教員懇談会の実施

開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとした。今年度の実施状況は以下の通りであった。

専攻	実施内容
人間生活科学専攻D	令和7年2月15日(土)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施し、その後に修士、博士課程の学生と教員の懇親会を実施した。遠隔地に居住し発表会に出席できなかった学生には、後日お菓子を配布した(健康・栄養)。修士課程の専修内発表会のときに博士課程の学生も教員との交流を促し、12月には博士課程の院生各自にお菓子を配布した(保育・教育学)。
人間生活科学専攻M (健康・栄養科学専修)	令和7年2月15日(土)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施し、その後に修士、博士課程の学生と教員の懇親会を実施した。
(生活環境学専修)	在籍学生が1名であったことから、懇談会は実施しませんでした。
(保育・教育学専修)	6月と11月と2月に専修内での研究発表会を開催し、その時に院生と教員の交流を促すとともに、発表会にはオンラインでの参加の社会人院生も少なくないため、12月に院生各自にお菓子を配布した。
言語文化学専攻 (日本文学専修)	言語文化学専攻日本文学専修では、令和6年7月18日(木)に開催した「日本文学専修院生研究発表会」終了後、日本文学専修の院生及び教員の懇談をおこなった。また、担当教員が学生からの意見や要望を普段から受け付け、適宜対処した。
(英語文学・英語教育専修)	10月31日(木)に対面で大学院研究発表会を開催した。会の後で院生・教員懇談会を開催して、院生から出された意見や感想を聴取した。
(国際文化専修)	令和6年7月1日(月)昼休みに大学院生および指導教員が昼食会をおこない、院生・教員懇談会とした。
現代社会研究専攻 (臨床社会学専修)	本年度は在籍している院生3名が全員社会人であるため、オンラインを活用しても一堂に会しての懇談会が実施できなかったため、各院生と主査・副査の教員を中心とした数名で、学生と懇談する機会を前期に持った。それに合わせるように院生間で懇親会を実施してくれており、互いの意見をそれぞれに交わした上で臨んでくれた。院生の意見を受け、多摩キャンパスの院生室の整備、備品等の運用・使用・調達手続き等を多摩・千代田の事務各部署と調整を行うことができた。千代田と多摩の2キャンパスの専攻であることを活かした院生との関りや懇談等を積極的に検討していきたい。

臨床心理学専攻	令和6年5月に新入生歓迎会を開催し、院生と教職員が交流した。また6月と3月の2回、大学院授業、臨床心理実習、院生室の環境や学生生活等について、大学院生から意見や要望、質問等を出してもらうように依頼した。その後、書面で提出された意見等(大学院生室のネットワークやプリンター、専攻内修論発表会の進行手順、院生室の空調の暖房の効きの悪さ、来年度入学の新 M1 の人数について)に関し、院生と大学院担当教員とでオンライン会議を開き、質疑応答と意見交換の時間を設けた。 その他、令和6年2月22日(土)には非常勤講師(スーパーヴァイザー)と院生の顔合わせと交流を目的とした懇談会/情報交換会を行うなど、昨年と同様に定期的な FD 活動を行い、その結果を大学院教育と院生生活の整備に還元している。
---------	--

Ⅶ. 学会発表の奨励に関する活動

学会発表に備えて、院生の各種学会への参加を奨励してきた結果、今年度の参加状況は次表の通りであった。活動類型のうち、「学会参加」のカテゴリーには「各種シンポジウム」「全国フォーラム」等への参加も含むが、学会での「発表」は含まないものとし、別途、Ⅸに記載する。

専攻	活動類型	件数	内容
人間生活科学専攻 博士後期課程	学会参加	1 件	【保育・教育学専修】 第 63 回大学美術教育学会
言語文化学専攻 博士後期課程	学会参加	11 件	【日本文学専修】 日本近代文学会春季大会、昭和文学会春季大会、昭和文学会第 75 回研究集会、キリシタン学研究会第 5 回例会、2024 年度中国語学会大会、令和 6 年度第 40 回漢文教育研究会、黒海ギリシャ舞踏 zoom 講演 1,2、キリシタン学研究会第 6 回例会、2024 年度キリシタン文化研究会大会、特別講演会 伊藤博文の政治思想と実践、2024 年度中国語学会 3 月例会
人間生活科学専攻 修士課程	学会参加	22 件	【健康・栄養科学専修】 東京都栄養士大会、2024 年度コク研究会公開シンポジウム、第 71 回日本栄養改善学会、全国栄養士大会、第 78 回日本栄養・食糧学会大会、第 28 回日本病態栄養学会年次学術集会、第 61 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会、第 43 回食事療法学会、第 37 回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会、第 44 回食事療法学会、第 114 回日本栄養・食糧学会関東支部シンポジウム、日本調理科学会、日本食物繊維学会、日本機能性食品医用学会総会 【保育・教育学】 日本保育学会第 77 回大会、日本ホリスティック教育/ケア学会、保育実践学会、子ども社会学会、日本保育学会、日本保育者養成教育学会 【生活環境学】 美術史講座「日本の着物(1)明治時代の美術染織にみる孔雀図案の変遷」、令和 6 年度服飾文化学会研究例会
言語文化学専攻 修士課程	学会参加	2 件	【国際文化専修】 第 29 回フィリピン研究会、黒海ギリシャ舞踏～平和を願うタペ～
現代社会研究専攻 修士課程	学会参加	2 件	【情報コミュニケーション専修】 NHK 放送文化研究所調査報告会、NHK 放送文化研究所文研フォーラム
臨床心理学専攻 修士課程	学会参加	9 件	社会福祉士全国大会、児童青年精神医学会、青年期精神療法学会、社会福祉士実習指導者研修、第 41 回日本ソーシャルワーク学会大会、第 72 回日本社会福祉学会秋季大会、第 43 回日本心理臨床学会、日本心理療法統合学会 第 5 回学術大会、日本精神衛生学会

Ⅷ. 学内発表会の奨励・支援に関する活動

学内での論文発表会については、「令和6年度大学院要覧」11頁に、「修士論文審査等に関する日程」のうち、第8番目の項目に「論文発表会の開催」として記載されている。その修士論文発表会を、令和7年2月22日に実施した。総勢17名の院生が発表した。当日のプログラムを以下に掲載しておく。

令和6年度 修士論文発表プログラム (オンラインによる開催)

日時 令和7年2月22日(土)9:00開始(ミーティングへの入室は8:40から可)

開会の挨拶 青江 誠一郎 人間文化研究科長
総合司会 松村 茂樹 教務委員長

開始予定時刻	発表順	発表者	発表者氏名
9:00		松村茂樹 教務委員長プログラム説明	
9:05		青江誠一郎 研究科長あいさつ	
9:10	1	臨床心理学専攻	小池 優衣
9:27	2	臨床心理学専攻	今瀧 倫乃
9:44	3	臨床心理学専攻	大用 ゆきの
10:01	4	臨床心理学専攻	浜本 佳奈
10:18	5	臨床心理学専攻	森川 実花
10:35～10:45 休憩・接続確認			
10:45	6	言語文化学専攻 日本文学専修	栗田 優羽
11:02	7	言語文化学専攻 日本文学専修	大野 愛結
11:19	8	言語文化学専攻 日本文学専修	森 美幸
11:36	9	言語文化学専攻 国際文化専修	フ セイ
11:53	10	言語文化学専攻 国際文化専修	廣野 朱音
12:10～13:00 昼食休憩・接続確認			
13:00	11	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修	鹿野 紀美代
13:17	12	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修	西川 真由
13:34	13	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修	佐々木 春花
13:51	14	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修	北嶋 優衣
14:08	15	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修	根本 友梨
14:25	16	人間生活科学専攻 生活環境学専修	佐久間 桃花
14:42	17	人間生活科学専攻 保育・教育学専修	笠原 麻衣子

- ・持ち時間1人17分(発表12分、質疑応答・交代5分)です。発表開始から12分経過時、17分経過時が分かるよう、Zoom上でお知らせします。
- ・発表開始時間は進行状況により前後する場合があります。また、通信の不具合やその他の都合により発表が開始されない場合は、発表順を変更する場合があります。

【オンライン実施上の注意】

- ・Zoomを利用して開催します。ミーティングのURLは、別途送信するメール本文でご確認ください。
- ・Zoomの個人表示名は自身の氏名にしてください。発表者は氏名の前に「発表」の文字を入れてください。
(例: 発表 大妻花子)
- ・発表時、Zoomを接続している場所の周囲の環境音や、紙をめくる音などが雑音としてマイクに入ることがありますので、極力静かな環境で参加してください。
- ・入室時はマイクをミュートにし、発表順になったらミュートを解除してください。発表の2分前にはマイク・カメラを用意し、パワーポイント画面共有の準備をしておいてください。
- ・ご自身の発表時以外はマイクをミュートにしてください。カメラはオン・オフどちらでもかまいません。
なお、発表者への質疑時に発言する際は、マイク及びカメラを必ずオンにしてください。
- ・自分の発表以外は録音や録画をしないでください。

Ⅸ. 院生論文集発行の奨励・支援に関する活動

新研究科の設置の趣旨に適合した院生論文集として、「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」に掲載することとした。令和6年度の修士論文概要は、オンラインジャーナルの”No.35 2025”に掲載される。各専攻での研究教育活動の状況は以下の通りであった。研究教育活動の内容を「論文発表」「口頭発表」「ポスター発表」に分けて以下に示す。

専攻	発表形式	題目
人間生活科学専攻 博士後期課程	口頭発表	保育における遊びのリスクマネジメント
	口頭発表	保育者養成校における”造形表現”を学びほぐす ～アンラーン[unlearn]に関する一考察～
	口頭発表	保育者養成における学修転換に対する試み ―入学時オリエンテーションに焦点を当てて―
	口頭発表	子どもの〈つくる〉活動のプロセスの解明
	口頭発表	多様な素材との関わり―小学生の造形活動―
	ポスター発表	アートで叶えるイロイロ
	論文発表	子どものつくる活動のエスノグラフィー ～C クリエイティブ・アートラボにおける小学生男児の事例～
	論文発表	多様な素材との関わり―小学生の造形活動―
	論文発表	松戸アートピクニック 2024 和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ
	論文発表	「クリエイティブ・リサイクルセンターKG」における取り組み ―造形表現ゼミと特別支援保育ゼミにおける教育実践―
	ポスター発表	保育者養成校におけるパネルシアターの授業への取り入れ方に関する考察 ―複数の授業実践の比較検討を通して―
	口頭発表	The New Effectiveness of Panel Theater in Special Education
	口頭発表	ストーリーメイキングのプロセスの検討 ―子どものパネルシアター体験の観察調査をもとに―
	論文発表	ストーリーメイキングの原点 ―乳幼児におけるパネルシアターの体験の観察をもとに―
	論文発表	学生の実態に応じた教員養成課程の授業計画の再検討 ―幼稚園教育実習終了時の学びの状況の把握から―
	ポスター発表	心理療法におけるポジティブ感情の相互的感情調節プロセスモデル構築と 実証的検討
	論文発表	妊娠期間中の食品摂取の多様性と産後うつ病との関連
	口頭発表	

言語文化学専攻 博士後期課程	論文発表	「長尾雨山とその交友」展の開催—大学博物館の活性化に向けて」シンポジウム記録
	口頭発表	
	口頭発表	マニラに追放された日本人キリシタンと日本人町
人間生活科学専攻 修士課程	ポスター発表	腸内環境変化が小腸上皮細胞の水チャネル AQP3 の発現に与える影響
	口頭発表	栄養学生の日中の眠気に影響を及ぼす睡眠習慣と食生活との関連性
	口頭発表	健常成人におけるブルーベリー葉茶が睡眠に及ぼす影響 —ランダム化二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験—
	口頭発表	もち性大麦摂取がストレプトゾトシン誘発性 2 型糖尿病モデルマウスの耐糖能および糖代謝関連臓器の遺伝子発現に及ぼす影響
	口頭発表	もち性大麦が 2 型糖尿病モデルマウスの耐糖能および糖代謝関連臓器の遺伝子発現に及ぼす影響
	口頭発表	「カワイイファッション」がポップカルチャーとして形成されていく様子と社会へ与えた影響
	ポスター発表	
	ポスター発表	保育者が”自分らしく”羽ばたくまで ～若手保育者の語りに着目して～
言語文化学専攻 修士課程	口頭発表	谷崎潤一郎に流れるワイルドの文脈——フェティシズムと女性表象
	口頭発表	台湾におけるサービス文化について
	口頭発表	宮沢賢治 心象スケッチ論—童話と春と修羅—
	口頭発表	A Student's Positionality as Seen through Her Language Learning History

X. 他大学との各種連携の活性化に関する活動

現在、現代社会研究専攻では、相互の交流と発展を目指して、社会学分野ならびにその関連分野の授業科目に関して、特別聴講学生の単位互換制度を設けている。詳しくは、「令和6年度大学院要覧」28 頁を参照されたい。

XI. 就職支援に関する活動

今後、キャリア教育の充実の観点から就職支援を強化していくための具体的な方策を検討していく。

専攻	主な進学先・就職先	
人間生活科学	就職	・学校法人敬心学園 ・株式会社明治 ・株式会社TESホールディングス
	進学	・大妻女子大学 人間文化研究科 人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修 修士課程 研究生 ・大妻女子大学 人間文化研究科 人間生活科学専攻 生活環境学専修 修士課程 研究生 ・大妻女子大学 家政学部食物学科 科目等履修生
言語文化学	就職	・株式会社末吉ネームプレート製作所
	進学	・法政大学大学院 国際文化研究科 国際文化専攻 博士後期課程

臨床心理学	就職	・めぐろ学校サポートセンター ・医療法人丹沢病院 ・八王子市教育委員会 ・国分寺市教育委員会 ・医療法人緑光会 東松山病院
-------	----	---

XII. 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動

社会人特別選抜の入学者に授業の開講時間など適切な配慮がなされたかについては、アンケートをとったところ、全体の評価は良く、社会人学生から一定の評価を受けているといえる。

また、「大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例」により勤務形態に配慮した教育研究体制を希望する学生の入学にあたり、入学先となる人間生活科学専攻教員への周知体制を強化した。

次年度も引き続き、千代田・多摩キャンパスの連携・充実を具体的にどのように推進していくか検討する。

XIII. 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動

新研究科の設置の主旨のひとつである「学部横断的（専攻・専修横断的）な教育・研究体制のあり方」、ならびに、「学位取得に至るまでの組織的指導体制の具体化・実質化」を推進して行くために、平成 23 年度入学生より、「中間発表会（旧研究計画発表会）」を研究科全体で実施することとし、「修士論文審査等に関する日程」のプログラムの中に位置付けることを決めた。

XIV. その他の活動

「その他の活動」として、院生によるティーチング・アシスタントの実施状況一覧を次に掲載しておく。

ティーチング・アシスタント等について

ティーチング・アシスタント等に 任用される大学院生・研究生	担当授業科目					
所属・学年等	開講学科等	授業科目名	授業担当 教員名	開講 時期	開講曜日 ・時限	開講 校地
人間生活科学専攻 (修士課程) 1 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	実践統計学	清原 康介	後期	水曜 3 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻	化学基礎実験	鈴木 優志	後期	金曜 3、4 限	千代田校
言語文化学専攻 (修士課程) 2 年	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) A	BARR, B.	前期	水曜 4 限	千代田校

	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) A	BARR,B.	前期	木曜 3 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Basic) B	BARR,B.	後期	水曜 4 限	千代田校
	文学部 英語英文学科	Speaking (Intermediate) B	BARR,B.	後期	木曜 3 限	千代田校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	キャリア心理学セミナー	本田 周二 八城 薫 三好 真	前期	水曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法	本田 周二 三好 真	前期	木曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	西川 千登世	後期	火曜 5 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会・臨床心理学基礎セミナー	八城 薫 三好 真 吉澤 良美	前期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅰ	伊藤 尚枝	前期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅰ	西川 千登世	前期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	八城 薫	前期	火曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	中村 紘子	前期	火曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法	田中 優 大久保 暢俊	前期	木曜 1、2 限	多摩校

	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	田中 優	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	伊藤 尚枝	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	中村 紘子	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	伊藤 尚枝	後期	火曜 3 限	多摩校

XV. おわりに

今年度も、「大学院進学意識に関するアンケート」、「大学院の研究・教育に関するアンケート」「大学院修了時アンケート」の3種類を実施した。評価を点数化し経年変化をみる集計方法も継承し、自由記述も基本的には概ねそのままを掲載した。

アンケートの回収率は「大学院進学意識に関するアンケート」が 81.8%、「大学院の研究・教育に関するアンケート」が 85.7%と十分な回答を得ることができた。しかし「大学院修了時アンケート」は 70.6%に留まった。修了時は大学院生にとっても教職員にとっても年度末の非常に慌ただしい時期ではあるが、大学院の FD 活動として修了生の意見を聴取することは非常に重要であるため、少なくとも 80%を超える回収率を目指す必要があるだろう。

さて3種類のアンケートを振り返ると、4 件法や 5 件法で回答してもらった設問は、概ね高い評価を得ていた。それらの諸結果を入学から修了までの流れで見ると、大学院進学にあたって学生が重視したのは「指導を受けたい教員がいること」「専門分野の学位が取れること」「研究したいことがあること」などであり、さらに進学にあたって影響力のある情報源となったのは「指導教員になる教員との相談」であった。このように指導教員となる可能性がある教員の影響が強いことが分かる。在学中の院生のアンケートからは、授業の水準への評価が高く、専門知識等を習得する上で十分な意義を感じており、研究指導や論文指導のあり方も高く評価していることが示された。そして修了生は、授業内容に全体として満足しており、研究指導や論文指導について指導教員から十分な指導を受けることができたと評価し、大学院での学生生活に満足している、とのアンケート結果であった。このように入学前から修了まで一貫して授業の専門性と、研究・論文指導など教員の指導が院生にとって非常に大きな影響を与えることが改めて確認できた。当然のことながら、学部生よりも大学院生の方が指導教員や副指導教員と緊密な関係にあり、相互に非常に強い影響を及ぼしながら学んでいる。それだけに指導教員と院生間に不和が生じたり、ましてやハラスメントもしくはハラスメントに近いことが生じたりすると多大な負の影響を及ぼすこととなる。残念ながら今回もハラスメントあるいはそれに近い状況が存在していることが推測された。大学院担当の教員は自らが院生に与える影響の大きさを改めて自覚するとともに、引き続き研究科全体としてハラスメント防止に向けて組織的に取り組んでいく必要がある。

次に自由記述への回答をみると、今年度も院生室への不満が大きいことが明らかであった。昨年度は多摩校のプリンターやネットワークの不調に対する不満が非常に多かったが、今年度

はそれに加えて千代田校の院生室の使い勝手に関する不満の声が多く上がった。千代田校に関しては院生室移転による一時的な混乱によるものであるのか経過を注視しつつ、案件によっては速やかに対応をする必要があるだろう。一方の多摩校のプリンターやネットワークの不調は大学院配賦予算の少なさやネットワークの構造的問題が絡んでいるものの、大学院生室の環境がよりよい研究活動を支える基盤となるため、速やかな対応を求めたい。

今後も継続的な FD 活動を通じて、本学大学院の教育の質を向上させると共に、大学院生にとって豊かな学びを保障する場であり続けられるよう尽力したい。

以 上